

さんぎょうはってん

「産業発展のために水力発電を」

電力事業の創始者

初代 金岡 又左衛門



ふくらむ水力発電への夢

「なんとという明るさ！ まるで魔法のようだ」

初代金岡又左衛門さんは、工芸品の品評会で見た「アーク灯」の明るさに、びっくりしていました。出

驚きの余り、じつと「アーク灯」

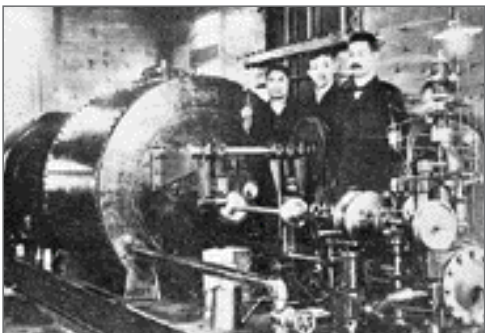
を見つめている又左衛門さんに吉さんが言いました。

「これが電気です。この電気で富山の町を明るく照らしたら、すばらしいと思いませんか」

「うーん、電気が…」

そのとき、又左衛門さんの頭に浮かんだのは、以前に聞いた水力発電のことでした。

水の落差を利用して水車を回転



大久保発電所を視察する又左衛門さん(右)

その電力の基礎を作ったのが、初代金岡又左衛門さんだよ。



電気の力は、さまざまな産業に欠かせないものだよね。



冷蔵庫やエアコン、信号機、電車…。電気は、まさに現代生活の主役ですね。

電気を使った灯は、何という明るさだ！
これからは電気の時代だな。
富山の地形に合った水力発電なら
産業の発展も、期待できるぞ！
よし、水力発電で富山を変えよう。

初代 金岡又左衛門さんのミニ年表

| 西暦 | 年齢 | |
|-------|-----|---------------------------------------|
| 1864年 | | 上新川郡新庄町(現在の富山市)に生まれる |
| 1894年 | 30歳 | 工芸品の品評会でアーク灯を見る(密田孝吉さんと出会う) |
| 1899年 | 35歳 | 大久保発電所を建設し、「富山電燈株式会社」(現在の北陸電力の母体)をおこす |
| 1907年 | 43歳 | 社名を「富山電気株式会社」と改める |
| 1911年 | 47歳 | 庵谷発電所を建設する |
| 1919年 | 55歳 | 庵谷第2発電所を建設する |
| 1928年 | 64歳 | 社名を「日本海電気株式会社」と改める |
| 1929年 | 65歳 | 亡くなる |



電灯の明るさに驚く人々。(富山市立新庄小学校6年 杉林亜耶さん)

させ、その力で発電機を動かして、電気をつくるといふ水力発電の話は、又左衛門さんにとって、興味深いものでした。

常願寺川の近くで生まれ育ち、洪水の恐ろしさや水のすさまじい力を、身にしみて感じていたからです。

「洪水をもたらす川の力を、逆に利用できますよ。急流が多い富山には、水力発電がぴったりだと思います。一緒に水力発電所を造りましょう」

こうして又左衛門さんは、電気事業へと乗り出すことになったのです。

夢への第一歩

水力発電には、「消費地に近い」「豊かな水がある」「適当な落差がある」という、3つの条件を満たす土地が必要です。

さて、どこに発電所を建設したらよいものか。

又左衛門さんと孝吉さんは、1年余りかけて、県内各地を探し回りました。そして、ようやく候補地を見つけました。大久保用水の塩地区(現在の大沢野町)です。

しかし、周辺に住む人々からは、発電所建設に反対の声が上がりました。

「エレクトリック(電気)が用水に入ると、水の中に毒が発生するぞうだ」

「田畑がめちやくちやになる!」

又左衛門さんは、電気の便利さや安全性などを、村人に説いてまわりました。

「電気は安全なものです。電灯は、行灯よりはるか

に明るく、火の用心もいいですよ」

又左衛門さんの熱心な説明は、人々の心を開き、ついに了解を得ることができました。

最後の難関は、資金集めでした。富山では前例がない電気事業に

お金を出してくれる人が、なかなか集まらなかったのです。それでも、又左衛門さんへの信頼感から協力してくれる人々が現れ、必要な資金を集めることができました。

こうして苦難の末、ようやく大久保発電所が完成し、発電機が動き出しました。

又左衛門さんが描いた夢の通り、富山の町に文明の灯がともったのです。電灯は、あつという間に広がりました。



大久保発電所

薬のとやまから工業県へ

「今までの富山の産業といえば、薬売りだった。これからは、工業の時代だ。さいわい、富山県は水力発電に適した場所が多く、安い電力が供給できる。その有利な条件を活かそう」

薬種問屋として、力を注いできた又左衛門さんは、

金岡又左衛門さんのひ孫にあたる金岡千鶴子さんにインタビューしました。

Q 又左衛門さんはどんな人でしたか？
A 私が4歳のときに亡くなったのであまり覚えていませんが、誰にでも優しい人だったそうです。

Q 大久保発電所ができたときの気持ちを聞いておられますか？

A それまでの苦労がとて大変だったのので、みんなで手を取り合って泣いたそうです。

Q 電気事業のほかにかんばられたことはありますか？

A お金がなくて学校へ行けない人のために、お金を出してあげていました。若い人が育つのが楽しみだったようです。

（インタビューを終えた感想）

又左衛門さんについては、電気を作ったことしか知らなかったけれど、貧しい人のために尽くすなど、いろいろな面で活躍した、優しい人だったことが分かりました。



富山市立新庄小学校6年
澤田幸宏さん 西原大貴さん 織田悠花さん

今度は、電気
の力で富山の
産業を盛り立
てようという
夢を抱きまし
た。

その第一歩
として、又左
衛門さんは、
庵谷発電所の
建設に取りか
かりました。
電気の発電量
を大幅に増や
して、工業の原動力として使おうと考えたのです。



人力車で、工事現場に向かう又左衛門さん。
（富山市立新庄小学校6年 勝原大貴さん）

しかし、山間部での工事はなかなかうまく進まず、予定はかなり遅れてしまいました。

「この工事は失敗だ。会社もつぶれるだろう」
そんなうわさまで流れ始めました。しかし、又左衛門さんはくじけませんで。必ず最後までやり遂げて見せる。

又左衛門さんは、自ら現場に出かけ、工事の関係者に語りました。

「手を加えなければ、ただ流れていくだけの神通川だ。その水を電気に変え、人々のために役立てることが、私たちの使命である。大変な工事だが、がんばってほしい」

又左衛門さんは、新しい機械を導入したり、トンネルの専門家を招いたりして、さらに工夫と努力を重ねました。

こうして、当時の北陸では驚異的な発電能力をもつ庵谷発電所が、とうとう完成したのでした。

よきパートナーを得て

又左衛門さんは、さらに会社の発電能力を増やすために、庵谷第2発電所の建設を計画しました。

しかし、それは当時の人々には無茶としか思えないような計画でした。工事の大変さはもちろん、大量の電気を買ってくれる会社も、探さなければなりません。

「自分ひとりの力では、とてこの計画を成功させることはできない」
そう考えた又左衛門さんは、信頼できる協力者を探し、山田昌作さん（後の北陸電力初代社長）を選びました。

「私は、富山を豊かな近代工業県に変えようと、必死で水力発電に取り組んできた。その夢のために、ぜひ協力してほしい」
又左衛門さんは、心を込めて説得しました。

「まだ若く未熟な私に、これほど期待してくださるとは……」
感激した昌作さんは、できる限りの努力をして、見事に工事を完成させました。この後、又左衛門さんと昌作さんは、豊富で安い電力を売り物にして、大工場の設立を呼びかけました。

残念ながら、夢の途中で又左衛門さんは亡くなりましたが、その夢は昌作さんに引き継がれ、富山県は日本海側で最もすぐれた工業地帯の一つへと成長を遂げたのでした。

又左衛門さんのエピソード：又左衛門さんのお母さんは、又左衛門さんにたくさんのお本を読ませましたが、中でも「太閤記（豊臣秀吉の伝記）」をよく一緒に読み、そこから人としての生き方を学ぶよう、教えたそうです。

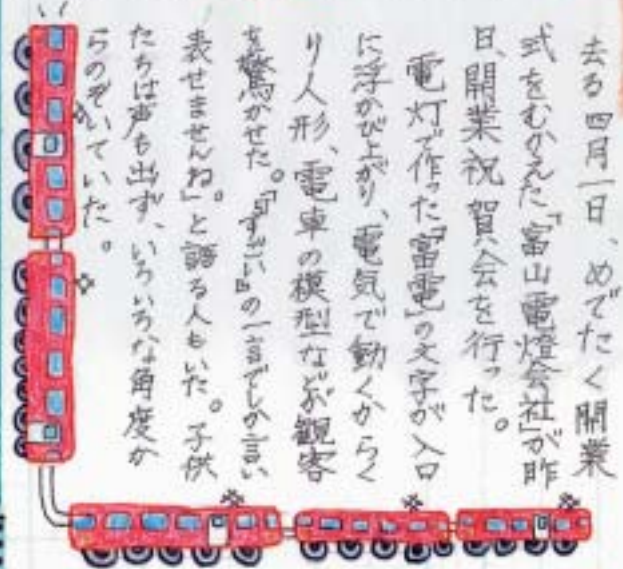


電気 万歳新聞

発行日 1899年4月26日
 発行者 薬師 空 希 子
 本多 亜 希 子

富電“希望”ともす

去る四月一日、めでたく開業式をむかえた「富山電燈会社」が昨日、開業祝賀会を行った。電灯で作った「富電」の文字の入口に浮かせたり、電気で動くからくり人形、電車の模型などが観客を驚かせた。「すこいの一まじりかい表せませんわ」と語る人もいた。子供たちは声も出さず、いろいろな角度からのぞいていた。



新たなヒーロー アーク灯

祝賀会に展示されているアーク灯は現在一般で使われている行灯に比べると、明るさが約10倍だとう。このアーク灯を市民生活にとり入れることができるか、次のような利点を生まれる。

- ・さらに明るく!
- ・省スペース
- ・火ではないので安全
- ・上からうつるせいで明るさが増す。



金岡社長の言葉

「すまじでもなく我が社の目的は単に金儲けのためではなく、工業を起す力として、電気のカを發揮できればというものであります」と、富電社長・金岡又左衛門氏は語る。それが彼の本心であることはその真剣な目を見れば明らかである。



社説

電気によって私たちの生活はどう変わるのたろうか? タイムマシンに乗って来て平成15年の子供たちに聞いてみました。



私たちの周りには電気があふれています。電灯だけでなく冷蔵庫、電子レンジなどで生活はとて豊かになりました。みんな金岡さんのおかげです。夜遅くまで働くことも多くなりました。電気のよい使い方を教えてくださいたいものです。

「富山電燈」設立当時の様子を、薬師空さんと本多亜希子さん（富山市立新庄小学校6年）が新聞にまとめてくれました。

常に時代の先を見て、行動していたんだね。すごい!



豊富な水をうまく利用して、安い電気を作ったから、全国から工場を呼ぶことができたんですね。



はんなりして人々を困らせるあばれ川の水を、逆に電力に利用したんだね。



庵谷第2発電所が完成し昌作さんと握手をする又左衛門さん。（富山市立新庄小学校6年 渡邊香織さん）

富山県の自慢は、工業ばかりではありません。チューリップの栽培でも、全国的に有名です。そのチューリップを富山県で最初に育てた人が、次のページで紹介する水野豊造さんです。